受け継がれるやまとのこころ

平安時代に成立したわが国の美術様式は、四季のある日本の風土に根ざした自然を愛でる繊細なこころであり、また王朝人らしく雅で華やかな装飾美を楽しむものであった。近代において、再びこの王朝様式に立ち戻って日本古来の美を再解釈しようとする試みがなされた。

17　住吉詣　松岡映丘

二曲一双

大正二年（一九一三）絹本着色

各一五四・一×一七〇・二

近代にふさわしいやまと絵として〝新興大和絵〟の創出に取り組んだ松岡映丘（一八八一～一九三八）は、はじめ橋本雅邦に入門したが狩野派の画風に馴染むことができず、あらためて住吉派の山名貫義に入門し直してやまと絵の道に入った。明治三十二年（一八九九）に東京美術学校日本画科に入学してからも、貫義の影響で平安・鎌倉期の絵巻を熱心に学習した他、水野年方、小堀鞆音、梶田半古らによって結成された歴史風俗画会に参加し、一層有職故実や古画の学習に没頭した。

大正元年の第六回文展に《宇治の宮の姫君たち》（姫路市立美術館蔵）を出品し、初入選を果たすと、その翌年の第七回文展に本図を出品し、褒状を受賞するとともに宮内省の買い上げとなった。本図は、『源氏物語』の「澪標」の段に取材したもので、光源氏一行と明石の君が偶然にも同時に住吉大社に参詣した場面を描く。海路で参詣した明石の君は、須磨での蟄居を経て都の権勢に返り咲いた源氏の華々しい行列を眺め、己との身分の違いを痛感して名残惜しくも舟を引き返し源氏との邂逅を避ける。源氏絵にしばしば描かれてきたこの場面であるが、映丘は住吉大社の景物である太鼓橋を描かず、画面下部に鳥居の一部をのぞかせることで場面を説明している。前景の砂浜を進む色とりどりの鮮やかな衣装を身に纏った源氏一行の賑やかさと、海上に漂う舟の上で涙を拭う明石の上のわびしさが、見事な対比の効果を生み、左隻左端で彼方へと飛び去ろうとする二羽の鵜ももの悲しさの演出に一役を買っている。ひとりひとりの人物の姿態は中世絵巻の図様を参照していると思われるが、中間色やグラデーションを巧みに用いた彩色、前景から後景までの自然な遠近感、そして登場人物の内面を想像させる劇的演出性などに、映丘が目指した新しい大和絵の方向性がうかがえる。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

古典再生——作家たちの挑戦

三の丸尚蔵館展覧会図録No. 72

編集　宮内庁三の丸尚蔵館

制作　株式会社 東京美術

翻訳　黒川廣子

発行　宮内庁

平成二十八年三月二十六日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan